

アルツハイマー病への進展予測における Mini-Mental State Examination の有用性

金井 光康¹⁾ 島崎 裕子¹⁾ 森田 詠子¹⁾ 木村 紘平¹⁾ 針谷 康夫¹⁾

美原 盤¹⁾

1) 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 認知症疾患医療センター

[目的] アルツハイマー病 (AD) に対する疾患修飾薬が現在開発中である。今後の使用にあたり AD の早期診断が切望されている。一般臨床で簡易に用いる Mini-Mental State Examination (MMSE) の有用性について検討した。

[方法] 2018 年 1 月から 2019 年 12 月に当院を受診、正常ないし軽度認知障害と診断、約 1 年後に再受診した 46 例を対象とした。MMSE は総点のみでなく下位項目についても評価した。画像検査は脳 MRI (VSRAD) 検査、脳血流シンチグラフィ検査 (Z-SAM 解析) を用いた。

[倫理的配慮] 当院倫理委員会の承認を受けた。データを数量的に扱い、患者個人を特定できないよう個人情報保護等に十分配慮した。

[結果] 37 例が認知症へ移行し、AD が 30 例、血管性認知症が 3 例、レヴィー小体病が 2 例、前頭側頭型認知症が 1 例、1 例が慢性硬膜下血腫の合併であった。AD へ進展した進展群 (30 例) と認知症へ移行しなかった維持群 (9 例) について検討した。総点数は進展群で 24.7 ± 2.7 から 22.2 ± 3.2 に低下した ($p < 0.05$) が、維持群は 26.7 ± 1.5 が 27.3 ± 2.2 と変動はみられなかった。下位項目「時間の見当識」が進展群 (4.2 ± 0.7) では維持群 (5.0) に比し有意に低下していた ($p < 0.05$)。進展群でみられた変化は、時間の見当識、計算、遅延再生の有意な低下であった。VSRAD の Z score や Z-SAM 値は、進行群と維持群で有意差は認められなかった。

[考察] 認知症への進行予測として、計算や遅延再生の障害も着目されているが、AD に進展した症例においては時間の見当識が有意な変化を示した。場所の見当識障害に比し、日時の把握が困難となることの顕在化が、AD 早期にみられる変容であることが示唆された。日時の見当識障害をみた場合、AD への進展が懸念され、食事や運動等の生活習慣のコントロールや社会的活動の維持など、発症予防に対する介入が望まれる。将来、薬物治療を早期に導入する際の指標に有用と考えられる。